

■「認知の混乱」第一段階にいる高齢者について

過去に向き合ってこなかった感情を今表現するのに苦しんでいる。
バリデーションの心得のある介護者は、そうした彼らの姿を妄想ととらえず、未解決の葛藤の苦しみをやわらげようとしなければならない。お年寄りは今の現実世界で経験している喪失がきっかけとなり、以前経験した喪失を思い出す。
「認知の混乱」の段階にいる人は、あまりにもたくさんの喪失に対応するために人を非難しているのだという事を理解しておかなければならない。

(1) 特徴

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、加齢と共に起こってくる身体的、社会的喪失を受け入れることができない。
- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、これまで重要な「人生の課題」に向き合ってこなかったため「人生の課題」とは、以下のとおりである。

「自己の確立」	「喪失を受け入れること、特に加齢と共に遭遇する喪失を受け入れること」
「親密さの獲得」	「新しい活動に加わること」「自我の統合に到達すること」
「適切に感情や行動をコントロールできるようになること」	「現在のこと、過去のこと、将来もかなわないことを受け入れること」
「他の人を信頼すること」	

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、日常生活のほとんどは普通に行動しているが、現実の世界では正しくないようなことを繰り返し言うことがある。

(2)「認知の混乱」の段階にいる人の身体的特徴

- ・目はくもりなく、はっきりし、焦点を合わせている
- ・筋肉は緊張気味
- ・あごは突き出し気味
- ・腕を組んで座る、あるいは立つ
- ・目的をもった動作をする
- ・声は甲高かったり、不機嫌だったり、辛辣だったりする
- ・話し方ははっきりしている
- ・最近の記憶に関しては、時どき忘れることもあるが、ほぼ保たれている
- ・読み書きの能力は保たれている
- ・認知能力は時間を正しく言う能力を含めてほぼ保たれている
- ・時どき尿失禁がある

(3)「認知の混乱」の段階にいる人の心理的特徴

高齢になると、「認知の混乱」の段階の人は人生の最後の課題に直面し、これまでずっと覆い隠してきた感情を表現しなければならない。

事例

少年の頃、パンツを濡らしてお仕置きをされ、恥ずかしく嫌な思いをした



同じ部屋に住んでいる利用者に対し、床じゅう水をこぼすと非難をしたりする。

それは自分が失禁しているのを恥ずかしくて認めることができないから。

「認知の混乱」にいる人は、現在の人やものを使って、もっと前に表現すべきだった感情を表す。

事例

80歳の「認知の混乱」にいるある女性の場合

40歳のときに夫を亡くしたが、つらい悲しみの気持ちを決して表に出さなかった。



彼女は、同じ部屋の利用者が結婚指輪を盗んだと主張。



寂しいということを否定したいのだ。気持ちを否定した結果、苦しみを生み出し、それを彼女は自分と同じ部屋の利用者に対して怒ることで対処したいのだ

- ・一般的に比較的充実した生活を送ってきた
- ・ある特定の人生の課題を解決することができずに、「人生の解決ステージ」を迎えている
- ・人生をとおして抑えてきた感情を表現する必要がある
- ・嫌な現実を直視したいと思わないし、できない。そしてその喪失を否定する
- ・親密になることを避ける。さわられるのは好きではない
- ・現実の時間と場所にしがみついている
- ・体の機能をコントロールできなくなることを恐れている
- ・精神機能をコントロールできなくなることを恐れている
- ・変化を恐れ、新しい環境にうまく適応することが難しくなる
- ・かつてよく使っていた対処方法を繰り返す
- ・コントロールを保とうとし、コントロールできなくなっていることを否定しようとする
- ・変化に抵抗する
- ・問題に直面することを恐れる
- ・分析されるのを好まない
- ・洞察して理解したいと思わない
- ・介護者に同意してもらいたいと思っている

(4)「認知の混乱」の段階にいる人の行動

- ・人を非難する、責める、めそめそする、不平を言う

こうしたことは、状況が悪くなると「認知の混乱」の段階にいる人がよく用いる対処方法。

- ・物を集めたり、ハンドバッグや財布、杖、新聞などをしっかり握りしめたりする傾向がある。

年をとると、溺れている人が救命具にしがみつくように、しっかり根づいた対処方法にしがみつく。彼らは年をとることを恐れている。事態が悪くなればなるほど、非難したり、めそめそしたり、不平を言ったりすることが増える。

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、盗んだ、毒を入れた、スパイしていると言って他人を非難し、自分の怒り、苦しみ、性的な恐怖心などをやわらげようとしている。

自分の生活へのコントロールを取り戻そうと、失ったもののシンボルとなるものをためこんでいくことがよくある。

- ・トイレットペーパーを集め、失禁への恐怖を表現したり、鉛筆や紙を集めて書く能力を失う恐怖心を表現したり、鍵を隠して家を失うことや運転する能力を失うことへの不安を隠したりする。

- ・長い間抑圧してきた感情を表現するために、他人を責めていた

- ・現在の喪失体験がもたらす恥ずかしさや罪悪感や不適切な感情に苦しみ、それがきっかけで過去経験した同じような感情が蘇った

■「日時・季節の混乱」第二段階にいる高齢者について

- ・「日時・季節の混乱」にいる人は脳の側頭葉を使って過去の像を復元することがよくある。

- ・脳の側頭葉はずっと前の音やにおいの記憶を蓄えている。

そのため「日時・季節の混乱」にいる人は、過去に聞きなれた声を聞くことがある。

- ・幼い頃に心に刻み込まれた記憶は、一般的にもっとも長く保たれているため、お年寄りには遠い過去の出来事を思い出すことが多い

事例

ある 90 歳の女性は、自分がたった今食事をしたばかりだということを忘れてしまうが、自分の子どもに食事をさせなければならないということだけは覚えていたりする。

- ・「日時・季節の混乱」にいる人は、分類する能力を失っている。

脳損傷がない人であれば、椅子やテーブルや机等を家具として認識できる。またオレンジ、リンゴや梨を果物の種類だと認識できる。しかし、「日時・季節の混乱」にいる人はもはや梨やリンゴを果物という種類に分類できない。

- ・実在するものと単に象徴的なものとの区別ができない。

母親でいたいと思っている「日時・季節の混乱」の状態にいる人には、赤ちゃんのように柔らかな手そのものが、赤ん坊になるのだ。亡くなった妻を恋しく思う男性には、娘が妻になる

脳梗塞やアルツハイマー型認知症による老人斑や神経線維変化によって大脳への損傷が起こり、分、時間、日、週といった時間の単位で考える能力を失っている

(2)「日時・季節の混乱」にいる人の心理的特徴

- ・スタッフの識別ができない。自分の家族を認識できないことがよくある
- ・名前を忘れる
- ・現在の人と過去の人の区別ができず、混同している
- ・最近の記憶は弱いが、遠い過去のことは鮮やかに思い出す
- ・わびしい今の現実と退屈さから逃げるために、現実から逃避し、過去のなじみある光景を追体験している。それは解決しようと葛藤している過去である場合が多い
- ・ものを人の代替として使う
- ・ものを類別・分類することができない
- ・読む能力は保たれているが、書き方を忘れることが多い
- ・注意を集中できる時間が短い
- ・なじみのある歌は覚えているが、歌うと音程がはずれていることがよくある
- ・ビンゴのようなルールのあるゲームができない
- ・自分の感情をコントロールできない
- ・愛の欲求やその他の感情を自由に表現する
- ・介護者の願いに合わせようとするつもりはなく、しばしば規則に従わない
- ・直感的な知恵は保っている
- ・心からの介護はわかる
- ・反論する介護者や同意したふりをする介護者を信用しない

■「繰り返し動作」(第三段階)にいる高齢者について

言葉を使い始める前の子どもの頃のような動きや発声にまで退行していくことがしばしばある。



自分自身を守るため、また感情を表現したいという基本的な人間の欲求を満たすため

- ・社会的コントロールを失っており、もはや自分の感情を隠そうとはしない。
- ・抑えていた感情を解き放つことで、自分自身を癒そうとする。
- ・「繰り返し動作」にいる人は、体の一部や、人やものを使って、過去の重要な人や出来事を表現する。



事例

保険の外交員をしていた人にとってはスーツケースが書類鞆になる。

- ・コミュニケーションの方法として、体の動きが言葉にとって代わるのだ。
- ・「繰り返し動作」にいる人は自己認識ができない。
- ・「繰り返し動作」にいる人は、鏡に映る自分の姿をもはや認識できないほど自己が不明瞭になる。そして、感情は外にこぼれ出るようになる。他の人から見れば不適切だと思うような形で、流れ出す。
- ・幼いときに覚えた動作が言葉から置きかわる。理性的な思考ができなくなり、非言語的な表現を使うようになる
- ・動作が感情を呼び起こす。言葉は理解不可能なものになる。
- ・唇、舌、顎、歯が勝手気ままに動き、新しい言葉を作り出す。

- ・「繰り返し動作」にいる人の行動には理由がある。



自分の体がどこにあるのか、もはや脳は伝えていないが、記憶は鮮やか。
現在のわびしい現実を切り抜けて生きていくために、幼い頃に定着した動作を蘇らせている。
「解決」の段階「繰り返し動作」にいる人は、そうやって喪失に対処し、尊厳を取り戻そうとしているのだ。

- ・「繰り返し動作」にいる人は、自分の行動を制止しようとする介護者を無視する傾向にある。

(1) 身体的特徴

- ・理解できる文章で話せない
- ・幼い頃に覚えた音を繰り返す。たとえば、舌打ち、うめき声、歌声など
- ・繰り返しの動作で感情を表現する
- ・タッチング、アイコンタクト、声の調子を通して、刺激を受けたときにのみ反応する
- ・声は低く、メロディーのような音調。あるいは甲高い声
- ・泣いたり、ドンドン叩いたり、同じ調子でうろうろ歩いたり、しきりに体を揺り動かしたりする
- ・目は半分閉じている。あるいは焦点が定まらない
- ・動作はとてもゆっくりになる
- ・尿失禁がある
- ・読み書きの能力が失われる
- ・歌う能力は残っている
- ・自分の体の状態がわからない

(2) 心理的特徴

- ・ごく幼い頃の経験は思い出せるが、最近の記憶を保つ能力がない
- ・名前や顔を思い出せない
- ・注意力が持続しない
- ・護者のタッチングと声を覚えている
- ・感情を一切コントロールしない
- ・外界との交流から身を引いて閉じこもっている
- ・自己認識ができない